かき　円星落葉病・角斑落葉病について

図１　発病葉（円星落葉病）

図２　発病葉（円星落葉病）

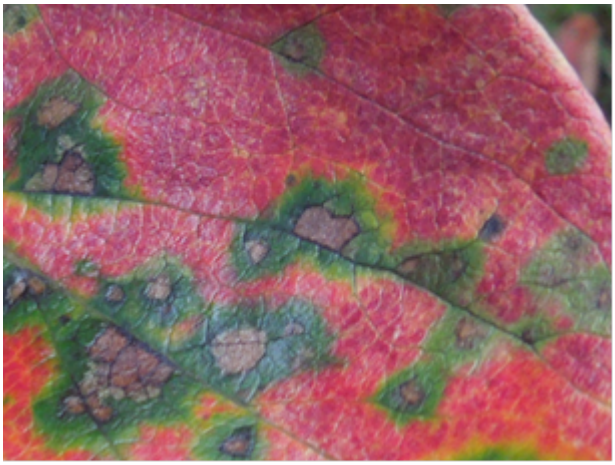

図３　発病葉（角斑落葉病）

図４　発病による早期落葉

１　生態

円星落葉病（*Mycosphaerella nawae* Hiura & Ikata）、角斑落葉病（*Cercospora kaki* Ellis & Everhart）はいずれも葉に褐色の病斑をつくり早期落葉を招くカキの病害である。円星落葉病は円形の病斑、角斑落葉病は葉脈に沿った角張った病斑をつくることから見分けることができる。

円星落葉病の一次伝染減は前年の発病葉である。５月上旬から８月に落葉上につくられた子のう殻より胞子が飛散し、葉裏の気孔より植物体に侵入し、60～120 日の潜伏期間を経て発病する。はじめ小黒点が現れ、しだいに拡大し周辺が黒色で囲まれた褐色の円形病斑となる。病斑上には新たな胞子はつくられず二次感染は行われない。

角斑落葉病の一次伝染減も同様に前年の発病葉である。５～６月の降雨により胞子がつくられ、その後飛散し、葉裏の気孔より植物体に侵入し、30 日の潜伏期間を経て発病する。はじめ淡褐色の不正形な病斑がみられる。病斑はしだいに拡大し、葉脈に沿った病斑となる。病斑上には胞子がつくられ、二次感染する。

２　発生状況

円星落葉病の発病は９月頃、角斑落葉病の発病は７月頃より見られるが、主な感染時期はそれぞれ、５～７月、６～７月である。発病は円星落葉病が９月より、角斑落葉病が７月下旬より見られる。円星落葉病は 15～20℃と比較的低温を好むため、冷夏年では発病が早まる。

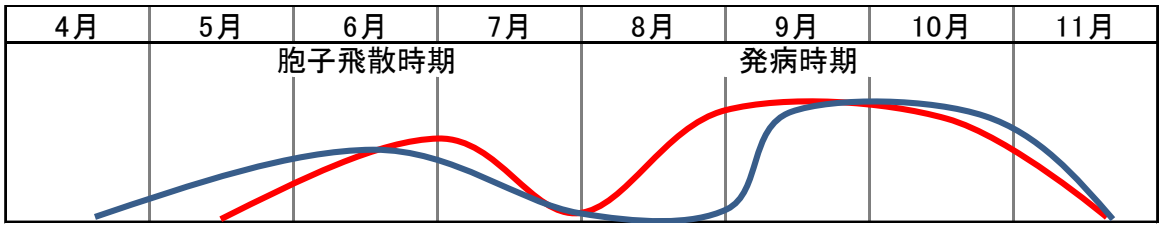

図５　落葉病発生消長（ー：円星落葉病、ー：角斑落葉病）

３　防除対策

（１）伝染源の除去

発病葉は次年度の発生源となるため、ほ場外へ持ち出し処分する。

（２）肥培管理

樹勢が衰えると発生が助長されるため、適正な肥培管理に努める。

（３）予防の徹底

発病後の防除では効果はないため、感染時期である５～７月に予防を徹底する。

なお、同一系統薬剤が連続しないようローテーション防除を行う。